第２４号
2013年３月１日

○発行
650-0004
神戸市中央区中山手通
７丁目25-38
神戸真生塾広報誌編集係
TEL (078) 341-5897
FAX (078) 341-8239
E-mail:kouhou@kbshinsei-j.org

○振替口座
郵便振替01100-8-18680

いやしの行為「イエスはそばに行き、手を取って起こされた

社会福祉法人 神戸真生塾 理事長　富川 直彦

今年の冬も風邪が流行りました。年末年始を中心に多くの子どもたちが感染して、休校休園を余儀なくされた学校、幼稚園・保育園も少なくありませんでした。幸いにも春のきざしと共に終焉に向かっており、神戸真生塾の子どもたちも概ね元気に過ごしています。病を患うと肉体的な苦痛だけではなく、日常生活を自由に営むことができないない負担を感じるなど思考は否定的になり、低次元な自己中心的な精神状態に陥りがちです。

福音書の中で最も古いマルコによる福音書は、その第一章からイエスが病をいやす振舞いが続けて記述されています。汚れた霊に取りつかれた男をいやし、ペトロのしゅうとめをいやし、多くの病人をいやします。そして、重い皮膚病を患っている人をいやします。第二章ではイエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろす友人たちの信仰によって救される中風の人の物語が記されています。非常にリアリティを感じるお話です。第三章以降でも手の萎えた人、悪霊に取りつかれたゲレサ人、ヤイロの娘とイエスの服に触れた女をいやされます。これらイエスのいやしの行為は十字架の死に至るエルサレムへの旅の終わりまで続きます。

マルコによる福音書によれば、イエスはこれらのいやしの行為に際して薬を用いておられません。特段の術を施された記述もありません。イエスは病む人のそばに立ち、ただ。手を差し伸べてその人に触れます。時には大声で病魔を叱られます。病む人と同じ地平の立ち、病む人のまことの隣人となり、悲しみを共に悲しみ、喜びを共に喜ばれます。

神戸真生塾定款の第一条には「キリスト教精神に基づき、多様な福祉サービスがその利用者の意向を尊重して総合的に提供されるよう創意工夫することにより、利用者が、個人の尊厳を保持しつつ、心身ともに健やかに育成されるよう支援すること」と記されています。「子どもたちのために」と要約してよいと考えます。ここでいうキリスト教精神の基本は、いやしに示されたイエスによる愛の行為の跡をたどり実践することと考えます。この愛の精神は神戸真生塾の歴史の中に脈々と受け継がれています。児童養護施設、乳児院、保育所、児童家庭支援センターに働く、すべてのスタッフの日々の活動を通して活かされています。神戸真生塾を支えてくださる多くの方々の支援の働きの内にも受け継がれています。そして、いま新たに神戸真生塾付属小児科診療所が加わろうとしています。地域の子どもたちのために福祉活動を推進する重要な拠点となるように努めたいと願っています。

しかし、現実の社会においては、子どもを取り巻く環境は厳しく、ますます困難に向っています。学校教育では普遍化が進み、個性は無視される傾向にあります。優勝劣敗の思潮が根強く、弱者の切捨てにつながっています。加えて、学校内外でのいじめの悪質化が懸念されています。家庭環境も憂慮されるべき状況にあります。特に都市部においては、近隣社会から隔絶し、孤立を深める家庭が増えています。この傾向が児童虐待、育児放棄といった忌々しき事態を生んでいます。このような状況のもと神戸真生塾に与えられる課題は、いずれも切実であり、ますます複雑化しています。一般解はなく個々の対応が必要です。子どもたちの通う学校、関連団体そして近隣社会との協調も必須になっています。

もっとも、私たちの現実は言葉通りには参りません。厳しい社会から突き付けられる困難な問題に苦しみ、敗北感に打ちひしがれる事も稀ではないと思います。そのような外的な要因だけではなく、自らの至らなさや弱さ、あるいは自己愛の汚さによってどうしようもない虚しさになやまされる日夜も多いと思います。それが当然だと思います。実践に努めれば努めるほどそれは否定され、力を注げば注ぐほど結果が得られないように思われてきます。考えれば考えるほど空しさが見えてきます。けれども徹底した肯定は必ず否定を伴うと思います。イエスは常に苦悩する人の隣人となり、弱い人を愛されました。しかし、最終的には社会からは否定されて十字架刑で生涯を終えます。「しかし、イエスの愛の精神はいったんイエスのもとから逃げ去った弟子たちに受け継がれました。そして２０００年後の私たちにも伝えられています。私たちには知り得ない神の愛の働きを信じて、それぞれの器に応じて「子どもたちのために」努めたいと願っています。

今後とも神戸真生塾の子どもたちとスタッフに対するご支援をお願い致します。

《児童養護 神戸真生塾》

クリスマス会

本年度もイエスキリストのご降誕をお祝いする祝会に、たくさんのお客様にお越しいただき、共にクリスマスをお祝いできたことを心より感謝しております。子ども達、職員共々、この日のために、早くから準備や練習を重ねてきました。祝会で毎年行われる、聖誕劇。練習では、毎日子ども達と奮闘しながら頑張ってきました。また、小学生は、ハンドベル演奏の練習、手話を使った歌の練習にも取り組みました。ハンドベルは、低学年チームと高学年チームに分かれて行いました。ハンドベルに1回触ったことがあるか、ないか・・。それくらいの1年生も頑張って練習してきました。そして迎えたリハーサル。聖誕劇も思うような演技が出来ず、ハンドベルも、練習で成功したときのように上手くは行かず、本番まで、ラストスパート！と必死で頑張りました。

そしてついに迎えた本番当日!!何度も練習を重ねた、聖誕劇では・・。さすがの子どもたちも、舞台袖では、緊張の表情を見せていました。しかし舞台に上がると一変。練習以上に、大きな声でセリフを言ったり、歌を歌う子ども達の姿に感心させられました。そして、ハンドベル演奏でも、綺麗なメロディーが会場に鳴り響きました。また、今回は職員と子ども達の有志で、手話の歌を行いました。「手話ってなに?」・・というところから始まった、まだ幼稚園にも行っていない未就園の子どもたちも、お部屋で、職員の手話を必死に目で追いかけ、覚えようと頑張っていました。そして、さすが真生塾の子どもたちです！何度か職員と一緒にすると、もういつの間にか、一人で歌いながら上手に手話をしていました。本番でも、舞台に上がり、覚えた手話を堂々と披露することが出来ました。子ども達が、舞台でたくましく、堂々と演技や演奏をする姿、そして、劇、演奏が成功し、舞台から降りてきた子どもたちの笑顔を見ることが出来、私たち自身、本当に子ども達の成長した姿を感じ、とても嬉しく思いました。子どもたち自身も大きな自信につながったのではないかと感じています。これからも、このような機会を通して子どもたちの自信につながり、たくましく成長していってほしいと願っています。

最後になりましたが、祝会にご参加いただいた神戸教員合唱団の方々、会場にお越しいただいたたくさんのお客様、本当にありがとうございました。来年度も、皆様方と共に素敵なクリスマスを迎えられますように。　寺岡

クリスマス食事会

毎年12月24日の夜は子どもたちがとても楽しみにしているクリスマスの食事会が行われます。

子ども会の5つのグループに分かれて各部屋でみんなと集まりクリスマスの特別メニューをいただきます。

子ども会のメンバーの子どもたちと集まり前もってどのメニューにするか大まかに考えておき、食事会前にアンケートを回して決めました。

今回は骨付き鶏のから揚げ、雪だるまのポテトサラダ、コーンスープ、フライドポテト、食後はクリスマスケーキにシャンメリー。クリスマスなので外に出かけている大きな子ども達もこの日はやはり楽しみで早くに帰ってきます。楽しい2時間はあっという間に過ぎてしまいます。

食後はクリスマスケーキを食べ、子どもたちが持ち寄ったトランプやカードゲームをしたりゆったりとした時間を過しています。

普段別の部屋で過す子どもたちも、小さな幼児の子ども達の面倒を見てくれたり小さなこどもたちも自分たちより大きなお兄さんお姉さんにくっついてほのぼのとした光景が見られます。

クリスマスの食事会は主に子ども会のメンバーの子どもたちが主導でやっています。またクリスマスの食事だけではなくクリーン作戦やボーリングに出かけたりしています。また3月にはまた新しいレクリエーションも企画中です。

子ども会を通して仲間で楽しく過ごすことを沢山経験しながら心豊かな生活ができるよう私たち職員も子どもたちと協力して盛り上げていきたいと思っています。　増本

ホームクッキング

神戸真生塾では、普段買い物や料理などを経験する機会が少ない子ども達に、たくさんの事を体験してもらいたいという思いで、月に２回程度、それぞれのお部屋で夕食を作ります。

出来るだけ台所の職員も入るようにしており、今回は、３歳～18歳の小規模グループに参加させてもらいました。

まず、部屋のみんなでメニュー決めをし、買い物にいきます。今回は、タコ焼きや野菜炒めなどになりました。

スーパーまでの道中、「今日は、何買うんやったかな?」「タコー!」など、今回のメニューについての話をしたり、和やかに買い物に向かう事が出来ました。

スーパーについてからは、年長児のN君が大活躍をし、「タコは向こうのスーパーの方が安かったけど、たこ焼きの粉はこっちの方が安い!!」など、見比べを頑張ってしてくれました。おかげで無駄なく買い物が進められました。

買い物袋に詰めながら、「俺はブロッコリーを切る!」「私は玉ねぎを切りたいな～!」と考えたり、帰ってからの調理について楽しく会話をしながら、協力して重たい荷物を持って帰ります。

お部屋について少し休憩をし、「さあ、頑張って晩御飯を作るぞー!」

スーパーで話をしていた切りたい野菜をみんなで手分けしてどんどん切って行きます。小学生のHちゃん、Sちゃんは日頃からよくお手伝いをしているので、とっても上手に切ることが出来ました。

M君、N君は難しいタコをタコ焼きサイズに小さく切っており、「たこ焼き屋さんになれるよ!」と思わず言ってしまうほど上手でした。

最年少のHちゃんも、みんなに負けじとタコ焼きの粉を頑張って混ぜたり、ゆで卵の殻をきれいに剥くことが出来ました。

そして、野菜炒めの担当を最年長のお料理上手なFちゃんが一人で頑張ってみんなの分をおいしく調理してくれました。

ご飯が全部出来あがったころ、遅れて帰ってきたAちゃんがみんなのお皿の盛り付けをしてくれ、完成!!

ご飯を食べながら、「今日はたまねぎを切ったよ!」「私は卵の殻を剥いたよ!」など、自分が頑張った事を話しながら、楽しく食事をすることが出来ました。

ホームクッキングを通して、ご飯が出来るまでの過程や大変さを学ぶことができると思います。

また自分たちで作った!という感動と食事への感謝にも気付いてもらいたく、これからも続けていきたいと思います。中迫

おもちつき

昨年12月28日、真生塾にて餅つきをしました。当日はあいにくの雨でしたが、つき始めの10時になると養護施設の子ども達や乳児院の子ども達は「おもち、おもち」と笑顔で集まってきました。施設長を始め子ども達も交代でお餅をついたり、返したり「そーれ!」「よいしょ!」の元気な声かけと共に次々とつきあっていき、とても美味しそうなお餅ができました。つきたてのお餅を子ども達はきなこや砂糖醤油、のりなど皆それぞれにつけて美味しそうにわきあいあいと食べ、子ども達のにぎやかな声や職員の威勢のいい声かけなどが飛び交う会となっていました。重たいきねを持って不安定にしている年少児に対し中高生の子児童が優しく支えてあげている姿を見ると、子ども達は人と出会いながら優しさや、優しくされることを身に付けていくものなのだろうなと改めて感じながら、並んでいる子ども達のお餅を丸める私の手も自然と優しくなり、たくさん食べて欲しいと丸めるスピードもあげていたと思います。

雨は最後まで降っていましたが雨とは裏腹に屋根の下で子ども達はたくさんのお餅を食べた後も長い間その場で楽しそうに過ごしていました。前日から準備をしてくださっていた栄養士さん、調理師さん、お餅をついてくれた施設長や子ども達、そしてお餅に期待を持って集まってきてくれた子ども達。皆さんのご尽力でお餅も非常に好評でまたとても明るく楽しいおもちつきになりました。

伊田

私の夢（退所にあたって）

井上顕家

ぼくには、ゲームデザイナーになる夢があります。なぜゲームデザイナーを目指しているのかと考えた時、それが自分の中で一番自信を持てる部分だったからです。ぼくは小さい頃から絵を描くことと、ゲームをすることが大好きでした。時間があればそれらに多くの時間を費やしていました。小学校や中学校の時は好きなキャラクターの模写をメインにイラストを描き、完成したイラストを友人に見せては評価をしてもらっていました。しかし、この時はあくまでも趣味の範囲でイラストを描いており、特に目指している夢も明確なものではありませんでした。中学校3年生になってから真生塾に入所し、その中で自分の進学先が決まって生活が落ち着いてきた頃に、友人の言った一言に心を動かされました。「お前ってイラストを描いたりゲームをしたりするのが好きなんだから、ゲームデザイナーを目指せばいいのに」この言葉を聞いてぼくはゲームデザイナーになるんだという、はっきりとした夢ができたのです。自分の取り柄はイラストを描くことと、ゲームが上手いことだと思っているので、将来仕事をするなら自分の得意としていることを活かせるような職業に就きたいと思ったのです。技術力が影響するゲームデザイナーは、自分の可能性を最大限に引き出せる仕事であり、多くのゲームデザイナーの中から勝ち上がっていくために自分の技術を向上させるという希望もある仕事です。だから私はゲームデザイナーになりたいのです。

高校を卒業し、真生塾を出たらＨＡＬ大阪という専門学校に進学します。そこで自分の技術を向上させ、可能性を広げていきたいと思います。

こどものつぶやき

・病院でレントゲン写真を撮影したＫちゃん、病院の帰り道「今日病院で〝記念写真〟撮ったなぁ」（Ｋちゃん・６歳）

・庭で遊んでいる時に、お股をぶつけたＨちゃん「お部屋帰ったらお股の修理して！」「えっ、修理?!」お薬を塗ってということでした。（Ｈちゃん・５歳）

・風船をもらって喜んでいたＫちゃん「風船にパンで名前書いて！」パンは食べ物ですよ（Ｋちゃん・６歳）

・「なんで〝子どもは風の子、大人はきのこ〟なん？」きのこじゃなくて、〝火の子〟だよ（Ｋちゃん・６歳）（Ｙくん・４歳）

・ホームクッキングの日、昼食前に「今日のお昼ご飯何？」と聞いてきたＳくんに「タコライスだよ」と答えると「え～、俺ら夜ご飯もたこ飯やのに！」確かに日本語にするとそうなるけど…（Ｓくん・10歳）

・お部屋の小さい子が年長児の言葉を真似て「わかってるって言うてるやろう！」とお姉ちゃんに言った事に対して８歳のＨちゃんが「まるで私みたい」と大笑い。自分のこと、ちゃんとわかってるんだね。（Ｈちゃん・８歳）

・食事中「毎日クリスマスやったら好きな物ばっかり食べられるのにな」（Ａくん・８歳）

・英語を習い始めたＭちゃん「魚はフィッシュ」と言うので「じゃあ、豚は？」と聞くと少し考えた後「…ブー？」ちなみに牛は「モー」だそうです（Ｍちゃん・11歳）

・入浴中「お兄さん、助けて～！」と声がしたので慌てて駆けつけると「石けん出して」…人騒がせな！（Ｔくん・13歳）

《乳児院　真生乳児院》

0・1歳児の利用激増

地域支援・リフレッシュサービス事業

中野　麻衣子

昨年12月、デイケア・ショートステイのリフレッシュサービス事業は、新しい建物に移動いたしました。

初日、真新しい建物に驚いた表情で、3歳のAくんと0歳の妹を抱っこしたお母さんが来院されました。Aくんを小さいときからよく知る担当の職員たちが出迎えると、お母さんも、Aくんも緊張が解けてホッとされた様子でした。お気に入りの玩具を見つけると、笑顔を見せて遊び始めました。

今年度のデイケア利用年齢別件数をグラフ（図1）にしてみますと、0・1歳児が急激に増加しています。0・1歳の保護者の育児疲れ、育児不安の急増の表れです。

また、ショートステイ利用理由では「育児疲れ」が、最も多く7割近くを占めています（図2）。育児疲れを理由に利用された方々のみを年齢別に集計してみますと（図3）、4歳児が28％と最も多くなっています。4歳児の増加については、乳児期より利用され次子出産後も引き続き利用されるケースが多い事と、乳児院を退所してからも継続してアフターケアを行っていく役割をこの事業が担っていることを表しています。

子どもを取り巻く育ちの環境は、時代の繁栄と共に衰退の減少を否めません。地域に根差した子育て支援の一環として、保護者が案心して子供を預けられるよう、これからも保護者の不安に寄り添い、一緒に育児を楽しんでサポートしていきたいと思います。

	H23年度	H24年度（～12月まで）
デイケア延べ日数	2049	1554
ショートステイ延べ日数	1975	1314

図１ デイケア・年齢別件数
（H24年度12月まで）

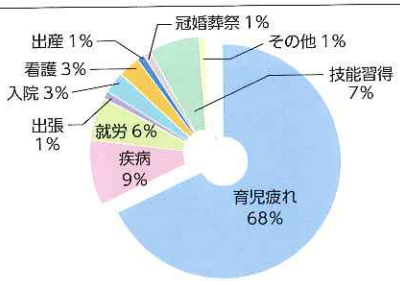

図２ ショートステイ利用理由
（H24年度12月まで）

図３ ショートステイ・年齢別件数（育児疲れ理由のみ）
（H24年度12月まで）

乳児　ほのぼのこども広場

・「ね、おそら見て。ひこうきがお絵かきしてるよ」
（3さい　おとこのこ）

・雨上がり、いっぱい落ちているイチョウの葉一枚を拾って言いました。「傘しとうねん」
（3さい　おとこのこ）

・「ね、わがままって誰のママ？」
（3さい　おとこのこ）

・いないいないバア遊びが大好きな1歳児。姿が見えないなと思ったら、「ばあっ」と玩具扉から出てきたよ。
（1さい　おんなのこ）

《真生きらきら保育園》

１月の園だよりより

クリスマス会はいかがでしたか？聖誕劇の練習では初めみんな「きょとん！？」としていて自分たちが劇に出るという意識はあまりなかったようです。でも、４・５歳児と一緒に練習を重ねるうちに歌って参加することに対しての意識が芽生えてきたようです。友だち同士で「立って歌うよ」「座るよ」ということを伝え合ったりしていました。時々それが言い過ぎてしまうことがあり、ケンカになりそうなこともありましたが、歌い始めると気持ちが切り替わることもありました。初めは自分たちが歌うことに精一杯でしたが、４・５歳児がやっていることに興味が出てきたようで、動いて台詞を言う姿を見すぎて、歌うことを忘れることもあるくらいだったんですよ。練習が終わった後には「先生見て、ガブリエルさんやる！」と言って動きを同じようにやってみせてくれることもありました。アドベントカレンダーを見る時には「わぁ、これは○○かなぁ」と劇の中に出てくる人物の名前をよく言っていました。「りんごさん、めろんさんになったらみんなもするよ」と言うと、驚いていましたが、やってみたいと思う役名を言ってくれるお友だちもいました。

クラスの歌や楽器あそびも十分に楽しみ「今日は歌う？」ときいてきたり、何気なく口ずさんでいることもありました。他のクラスの歌も遊んでいる最中にきこえてくると口ずさむことも増えていました。歌ってみたいと思う気持ちがたくさんでていました。クリスマス会では聖誕劇の『聖歌隊』という今までとは違った新しい経験をしました。子どもたちも少しいつもの雰囲気とは違うと思って参加していたように思います。これからも色々な経験ができるようにしていきたいと思います。

３歳児クラス担任：山口郁恵

２月の園だよりより

寒さが（子どもたちのことばを引用すると）「キーン」と身にしみる今日この頃です。１月の前半はお正月の雰囲気を楽しみながら、毎日を過ごしました。

お正月あそびでは、お餅つきを体験しました。４歳児の子どもたちは、少し緊張した表情で杵を手にしたものの、いざつきだすと笑顔になっていました。５歳児の子どもたちは、「任せて！」とばかりに、ギュッと杵を握りしめ、後半は自分の力だけでつくことにも挑戦しました。今年のおもちは、大人がついたものと同じくらいにしっかりとした出来になり、美味しくいただくことができました。お部屋の中には、以前私が作ったちりめん細工の鏡餅を飾りました。絵本コーナーに飾られたその飾りを、興味深そうに眺めたり、お友だちと「おもちの食べすぎには注意せな、お腹がポンポコになる」や、「このエビって上等やねんで」などなど、聞いていると思わず笑ってしまうような会話も聞かれ、ほのぼのとした雰囲気のなかでお正月を過ごしました。

後半は、命の大切さを感じながら過ごすことに意識を向けました。その中で大きなものとなったのは「絆の日」でした。「今年こそは」と言いながらなかなか実現できなかった「絆の日」を、今年度は行うことができました。職員の中にも被災経験者がいますし、近しい人を震災で亡くした者もいます。神戸という町で今を生きていることを改めて大切にし、日々の営みに感謝することを再認識するきっかけとなったのが、東日本大震災だったと私は思います。今回「絆の日」を企画するにあたり、子どもたちには４月から折に触れて「いのち」について考える機会を作ってきました。食前の挨拶に「いのちをありがとう」と言うことばを取り入れました。また、動植物の成長や寿命についても触れてきました。（毎日の水やりやカブトムシの〝トムちゃん〟）そして、８月には戦争について考えました。また、敬老の日には「年を重ねる（年をとる）」ということについても話をしました。そんな積み重ねのなかで、絆の日当日は、いのちへの意識を更に深めることができたのではないかと思います。炊き出しの場面で、「４・５歳児の子どもたちには、０・１・２歳児の子どもたちの食事の介助をさせてみてください」と全職員に依頼しました。私としては、日頃の子どもたちのクラスでの様子・成長をどのような状況でも発揮して欲しい、いえ、きっと発揮してくれるという想いがありました。その想い以上の力を子どもたちは発揮してくれました。自分が食べることを後に回し、積極的に小さい友だちの食事を手伝い、こぼした食べ物を処理し、「美味しいね」と声を掛け、笑顔を向けてくれていました。後でビデオを観ながらこみ上げるものがありました。「本当に大きくなったなあ」と担任として、心から嬉しく思いました。

２月は、生活発表会があります。生活発表会が終われば、卒園式の練習がはじまります。それぞれの「節目」に向けて歩み出します。４・５歳児のクラスらしく、楽しく仲良く、そして「みんなで」、一人ひとりが笑顔で過ごせるようサポートしていきたいと思います。

４・５歳児クラス担任：森本みずき

《児童養護施設　神戸真生塾》

自立援助ホーム 子供の家

開設から一年…

平成二十五年三月一日で「自立援助ホーム子供の家」が開設して一年になります。

垂水区本多聞に、神戸市が全国で初となる公の施設として開設し、神戸真生塾が指定管理者として事業を運営しています。

児童自立生活援助事業として第二種社会福祉事業に位置づけされ、義務教育終了後～二十歳までの児童を対象に男女各六名の計十二名定員です。

二月一日現在は男子三名、女子四名の計七名が入所中。（延べ人数は男子四名、女子九名の計十三名）

児童養護施設からの入所、就労先を退職したため住居も失ったケース、一般家庭や弁護士から相談があったケースやこども家庭センターへ相談があったケースなど様々な状況ですが、どの子どもも安心して生活できる場所として、また、自立に向けて考え見つめ直す場所として、毎日、生活しています。

自立援助ホームの特徴は、入居している子ども達が就労を条件として自立援助ホーム利用料の支払いをしていることです。

これは、社会生活を営むために必要な住居費に当たります。また日常生活において必要な経費も細かく計算し、一ヶ月間の収支を考えていきます。

このように、自立援助ホームにいる間に絶えず、社会生活を自分の力で営んでいける力を養うことを目標に、子ども達と話し合っています。

神戸市立
自立援助ホーム子供の家

神戸市立
子育て支援センター　子供の家

この一年の間に、自分の進路を自己決定できたケースも出てきました。その決定を自分自身でしたことに大きな意味があります。今まで、大人の指示に従ってきた子ども達が、自分で決断することができたのは、大きな進歩です。もしかすると、その決断は誤りだという人がいるかもしれません。でも、今まで決断したことの無い子ども達が決断したのです。私たちは、その決断を支持し、間違いに気づけば帰ってくればよいと考えています。

まだまだ手探りの状態ですが、日々、子ども達と共に頑張っています。

神戸市、こども家庭センター、児童養護施設、児童自立支援施設、ハローワークなどの関連機関の方々、そして地域の皆様、就労先の企業、広報誌をご覧の皆様、今後もご理解とご支援の手をお借りしながら取り組んでいきますので、よろしくお願いします。

子育て支援センター 子供の家も 頑張ってますよ！

平成二十四年度から「子育て支援センター子供の家」も同様に神戸真生塾が事業を運営しています。

中学生以上の三名在籍中ですが、毎日、夢に向かって懸命にがんばっています。

職員と子ども達の関係も良好で、日々笑い声が聞こえてきます。

子育て支援事業も 取り組んでます！

子育て支援事業として、毎週火曜日、金曜日の午前十時から十一時三十分まで「子育てサロン」を開催しています。

地域の未就園児のいる子育て家庭の方たちが集まり他のお子さんとも交流しながら母親同士の情報交換などしています。毎回、多数の方たちが参加し、職員がする様々なゲームや手遊びなども好評です。

また、「母と子のリトミック」も月三回、月曜日に開催中。２歳児クラスは盛況で、歌や音楽に合わせて体を動かしている姿に、思わず微笑んでしまいます。

多胎児親子の交流会として毎月一回のホール提供が十月からは毎月二回に増え、双子ちゃんや三つ子ちゃんたちが、元気に走り回っています。

最後に、当施設のアイドル？カメちゃんをご紹介します。近づくと急いで寄って来て　子ども達と職員を癒してくれています。今は冬眠中ですので、春になったら、ぜひ会いに来てくださいね。

小西

皆様のご意見、ご要望をお聴きしています。

神戸真生塾苦情処理委員会

苦情受付担当者　難波美智子（子ども家庭支援センター ロータリー子どもの家 センター長）
森　みずき（真生きらきら保育園 主任保育士）

苦情解決責任者　富川　和彦（児童養護施設 神戸真生塾 施設長）
綿谷　榮子（乳児院 真生乳児院 施設長）
上杉　　徹（保育所 真生きらきら保育園 園長）

第三者委員　森光　規之（当法人 監事 ）
中村　悦子（主任児童委員 中央区山手地区民生委員児童委員）

苦情受付件数　平成24年11月より平成25年2月末まで　0件

子育てに困った時は先ず電話！

毎日、午前9時～午後6時、緊急のご相談は夜間もOKです。

ロータリー子どもの家は、児童福祉法に基づく児童家庭支援センターとして、神戸市から認可を受けています。

二〇〇五年度の四月より、従来の活動とともに、子どもと家庭についての専門相談機関として、働いています。

子育てホッとライン（相談専用）

TEL.078-341-6493

神戸真生塾子ども家庭支援センター
（ロータリー子どもの家）

Homepage　http://www.rotary-kodomonoie.org/

編集後記

今年は例年になく強い寒気が押し寄せ、凍てつくような厳しい寒さが続いていましたが、そんな厳しい寒さの中でも桜の木の芽は少しずつ膨らみ始め、少しずつ春が近づいてきている事を知らせてくれています。

皆様のご支援をいただき、今回も広報誌〝愛〟24号を皆様にお届けする運びとなりましたことを嬉しく思います。今回も児童養護施設・乳児院・保育園・自立援助ホームの4つの施設それぞれの行事や子ども達の生活の様子をご紹介させていただきました。1つ1つの記事を読んでいただき、普段の何気ない生活の中から生まれる、子ども達のキラリと輝く瞬間を感じていただくと同時に、子ども達の日々の生活に思いを馳せていただければ幸いです。

子ども達はみんな悩み苦しみながらも、紙面でご紹介した様々な行事を通して、また皆様の温かい支えで、一歩ずつ成長しています。寒さの中でも確実に膨らむ桜の木の芽のように、子ども達一人一人が少しずつけれども確実に成長し、それぞれが自分だけの花を咲かせることが出来るようにと願わずにはいられません。

最後になりましたが、今回も広報誌を発刊するにあたりご協力をいただきました方々、また日頃よりご支援いただいている全ての皆様方に感謝いたします。　金岡